

固定観念を超えて—未知なる情報への航海—

2012年7月4日

文責：情報・メディアセクション一同

序章

“さっき、友達の薬局に高校生くらいの若い男の子がトイレットペーパーを返品しに来たとのこと。聞いてみたら、『親が昨日二つも買って来て、みっともないと思って返しにきた』んだって。今時の高校生の口からみっともないって言葉がでてきたのでびっくりしたって言ってた。日本の未来は明るいな。”—これは 3.11 の震災時にソーシャルネットワークサービス、Twitter 上においてつぶやかれた一言である。未曾有の震災を受けて悲しみに沈む中、こういった人々の行動が Twitter 上でいくつもつぶやかれた。それと同時に動画共有サイト YouTube では”Pray for Japan” と称された動画が世界中から寄せられ人々の心を勇気づけた。しかし、その一方で大量に流れる情報によって混乱を招いたこともまた事実である。

現代を生きる私たちにとって、インターネット、ソーシャルメディア、スマートフォンといった電子メディアは、生活の一部となっている。どこに居ようと、何をしようと、いつでもどこでも誰とでも繋がれる。そのような環境に私たちは生きている。

このような時代を生きる私たちは、新しいツールであるインターネットと、どのように関わっていけばいいのか、このツールは私たちにとって良いものなのかわるいものなのか。今回で四十年目となる十大学合同セミナーにおいて「情報・メディアセクション」が初めて設立されたことにはおそらく、そういった疑問に一つの解を見いだして欲しいという期待が込められているのではないだろうか。

本論において「情報・メディアセクション」は「グローバリゼーションと安全保障の潮流-多元化する脅威から何を守るか」という大テーマのもと、数あるメディアの中で最も現代的なメディア、つまりインターネットが安全保障という側面においてどれだけ有効であるかを論証していく。その上で、まず第一章において大テーマから本論における「インターネットによる個人の変容は国際社会に影響を与えているのではないか」という問題意識がどのようにして醸成されたのかを説明する。第二章においてその問題意識を問いつめた結果生まれた「インターネットによる情報の多様化によって、個人が社会を改善できるのではないか。」という問いに対して、サウジアラビアの女性運転解放運動を事例に論証していく。第三章においては第二章の事例を考察する中で見いだした「インターネット上にお

ける”場”」について論じ、その「場」が個人の意識の変容においていかに有効であるかについて普遍化を試み、終章において本論での問いに対しての解を示したい。

第一章

第一章においては、今期の十大学合同セミナーの大テーマ「グローバル化と安全保障の潮流～多元化する脅威から何を守るのか？」から、本論での問題意識「インターネットによる個人の変容は国際社会に影響を与えているのではないか」がいかにして生まれたかについて説明する。「情報・メディアセクション」は十大における大テーマを考えた際に、まず本セクションにおけるグローバル化とは何かという問いがあった。それに対して情報のグローバル化つまり国境を越えた情報の移動が容易になり、個人の意見が世界に広がることこそ私たちのセクションにおけるグローバル化であると考えた。そのためまず、第一節において情報革命とは何か。それによりなにが変わったのか、という点を明らかにする。第二節においてはその情報革命後の世界でどのように脅威が多元化したのかについて表を用いて分析する。そして第三節において問題意識、問い、仮説に至った経緯を説明していく。本論における問題意識は「インターネットによる個人の変容は国際社会に影響を与えているのではないか」とし、問いは「インターネットによる情報の多様化によって、個人が社会を改善できるのではないか」と設定した。そして仮説は「インターネットの普及によって起きた発信力の向上などによる個人の能力の変容は、今まで国が扱いきれなかった問題や表だって見られていなかった問題を表象化・顕在化させ、情報の選択の幅という情報の多様化が生じた。それによって起きた個人の意識の変容は、個人という小さなアクターから社会を改善できるのではないか。」である。

第一節 情報革命によってもたらされた変化

情報革命は専門家によってその定義が様々にあるが、本論においては新聞等の紙媒体から電子媒体へと移行した時期を第一次情報革命とし、インターネットの普及までの時期を第二次情報革命と位置づける。第一次情報革命期における新聞は18世紀から19世紀にかけて情報の流通源として確立しており、それによって民衆は同じ情報をほぼ同時に得られていたと考えられる。このことから、新聞がメディア世論を形成する契機であったといえる。しかし新聞の情報ネットワークは船舶・馬車・人力によるモノと同速度でしか伝達することができない通信方法を基盤とするものであった。しかし、その後登場した電信技術により、今までのモノと同速度の情報伝達から空間的な距離をなくし、空間を越えたより早い情報の送受信が可能した。また、社会は電話や無線通信技術といったさらに新たな技術が登場し、その発展に伴い瞬時に情報をやり取りする空間を拡大した。これにより社会は、今日の世界同時的な情報通信が可能となった社会へと、変化を遂げたのである。つま

り、電信の登場は世界を瞬時的な情報通信社会へと変化させたのであり、電信によって形成された情報ネットワークは今日における情報社会の原点であったと言える。

電信技術の発達を受けて、新聞などの紙媒体と同様、テレビやラジオなどに代表される電子メディアも市民が情報を入手する手段としての役割を担っていた。だが、これらのメディアは誰もが知りたい情報の発信を求められるだけでなく、国家や企業にとっての利益も同時に求められるため発信される情報は“商業的に価値のある（国家や企業の利益になる）情報”を報じる傾向にあった。その様な情報が必ずしも個人が知りたい情報と一致するとは限らず、簡単に個人が望む情報を得ることはできなかったと考えられる。

さらにメディアは政府との関わりも強く、第二次世界大戦中の報道からも分かるように政府にとって不都合な情報は流されず、もみ消されることが多い。そのため、国民に客観的な事実に基づく情報が伝わらない。これは現在の報道に関しても言えることで、今回の東日本大震災における原発反対のデモなど政府にとって都合の悪い事実がニュースになることは少ない。各メディアによって発信される情報は先述したように政府からの圧力や各メディアが持つ政治的思想によって情報が一面的となり、発信者にとって都合のいい情報のみが伝えられる傾向にある。そのような報道では客観的事実に基づいた報道がされにくく、国民が自らの安全を守るために必要な情報（例えば震災時における原発の放射能問題）が得られないといった弊害も生じている。

既存のメディアのようなトップダウン式の情報伝達の形を変えたのはインターネットであった。インターネットは登場以降、新聞やテレビやラジオなどの他の電子メディアと同じく、媒体として情報伝達の機能を果たしてきた。インターネットの最大の特徴は、情報の送り手と受け手の双方向に送受信が可能な構造を持っていることである。そして、その特徴により、市民は必要な時に自分の欲しい情報を手軽に、かつ早く手に入れられるようになった。インターネットの普及によってネットユーザーが急激に増え、インターネット自体もユーザーの環境に合わせて発展を重ねてきた。インターネットの影響力は“革命”と呼ばれるほど強く、情報伝達の機能を超えて個人の生活に変化をもたらしている。

インターネット普及初期である1970年代後半は少数の専門家がコンテンツを開発して大衆に公開し、特定の空間に形成された掲示板を通じてユーザーが意見を提示する、一方的な情報通信構造が大多数を占めていた。また、インターネット上に形成されたコミュニティの規模も小さかった。だが、2000年代に入り“ソーシャルメディア”という新しいメディアが発生した。個人が意見を発信、共有することが可能な“YouTube”や“ブログ”また、“Twitter”など意思表示を目的とした参加型ウェブであるSNSがこれにあたる。

これらは個人の情報発信によって成り立つメディアであり、一般個人の発信が不特定多数の目に触れるという点で従来のメディアとは大きく異なっている。また、それは人と人とのつながりを生み出すコミュニケーションメディアとも言える。スマートフォンを含む携帯電話やパソコンを例として挙げられる発達した通信機器によって、インターネットへのアクセスが容易になったこともソーシャルメディアを普及させた大きな要因である。

う。このような通信機器の発達により、いつでもどこでも誰でも簡単にコミュニケーションを取れるようになった。またそれら通信機器が普及したことで、SNS などのソーシャルメディアのユーザーが増え、ありとあらゆる様々な分野の情報を個人も手軽に発信できるようになった。ソーシャルメディアを通じて個人間のコミュニケーションが容易となり、不特定多数の人とも繋がることも可能になった。

新しいインターネット環境は多方向の情報通信構造を作り出した。個人が情報を発信する主体になり得たことで情報の流れも多様化し、情報選択の幅も広がった。そして個人の意見が自由に発信できるコミュニティが形成されることでインターネット上での議論が可能となった。

第二節 脅威の多元化の分析

以上第一節において情報革命が人々の生活を変え、それにより個人が容易に情報を発信出来るようになったことを論じた。次に第二節では、どのように脅威が多元化したのかについて、表を用いて説明していく。

アクター		価値	脅威(アクター・抽象的なモノ)	行動・手段
国家		国益(政治・経済の安定、国民の安全)	国家	侵略行為、テロリズム (物理的破壊)
			組織(企業、テロ組織)	デモ、ストライキ
			現象	自然災害、内乱状態
組織	企業	利潤(利益)	組織(企業)	テロリズム、倒産
	テロ組織	目的(革命: 政府不満を転覆させたいレベル)	目的を阻害するもの (国家・企業)	
			現象	自然災害、内乱状態
個人		生活・思想	国家、偏った情報	情報統制・操作、虚殺
			組織(企業、テロ組織)	情報統制・操作、テロリズム
			個人	犯罪者(物理的)、節度の乱れ、差別
			現象	自然災害、内乱状態、貧困

表 1：第二次情報革命前¹

アクター		価値	脅威(アクター・抽象的なモノ)	行動・手段
国家		国益(政治・経済の安定、国民の安全)	国家	サイバーテロ、情報統制 (GreatFireWallなど)
			組織(企業、非営利団体、テロ組織)	サイバーテロ、情報統制、情報拡散、
			個人(反乱分子的な)	ハッキング、サイバーテロ、情報収集・拡散、集団化
組織	企業	利潤(利益)	利潤を侵害するもの	情報漏えい、サイバー攻撃
	非営利団体	目的(改善:生活...etc水準レベル)	目的を阻害するもの(国家・企業)	情報統制・操作
	テロ組織	目的(革命:政府不満を転覆させたいレベル)		
個人		発信・受信力(情報の多様性)	国家・組織(企業、テロ組織)、偏った情報	情報統制・操作(国家・企業)、文化淘汰(アイデンティティ喪失)、デジタル・ディバイド

表 2：第二次情報革命後²

この表では第二次情報革命前後で、どのアクターに対してどのような脅威があるのかを分類した。一般的な安全保障とは、これまでの大戦や冷戦に代表されるように主に国家間を想定したものである。しかしインターネットの登場によって安全保障の概念は大きく変わったのではないかと考える。現在、主に先進国においてネットワーク環境が整えられている。そのため個人単位でのアクセスが容易になり、結果としてネットワークへのサイバー攻撃を受けやすくなった。企業においては個人情報やインターネット上で管理するようになったことで、他の企業や組織団体、個人からのサイバー攻撃、ハッキング等の脅威にさらされるようになった。いずれも、こうした行為の主体の中に「個人」が浮かび上がったことが、第二次情報革命後に起こった大きな変化であろう。つまりインターネットの登場により、安全保障の構造が国家対国家の関係から個人を中心とした構造に変化していったと言える。

では、上記のように安全保障の構造が変わったことによって、国家は何を脅威と感じるようになったのだろうか。本セクションにおいてはその脅威は思想や、主張などの国家が統制できない情報を発信する個人ではないかと推察した。この推察の所以として、2010年

のアラブの春に見られるソーシャルメディアを利用した革命、デモ行動などが挙げられる。統制できない情報を発信する個人という脅威に対して国家は規制やネット検閲、情報操作などで対策を取っている。ネット検閲に関して言えば、中国での Great Fire Wall が例として挙げられる。国家は個人が意識変容を起こし暴動を発生させるかもしれないという懸念からインターネットを検閲している。このように国家が脅威にばかり関心を向けているために、本来国家によって守られるべき弱い個人が国家によって脅かされていると推察した。

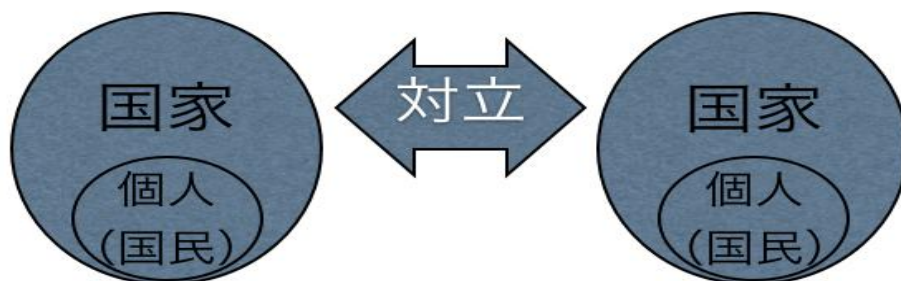


図 1：従来の対立構造³

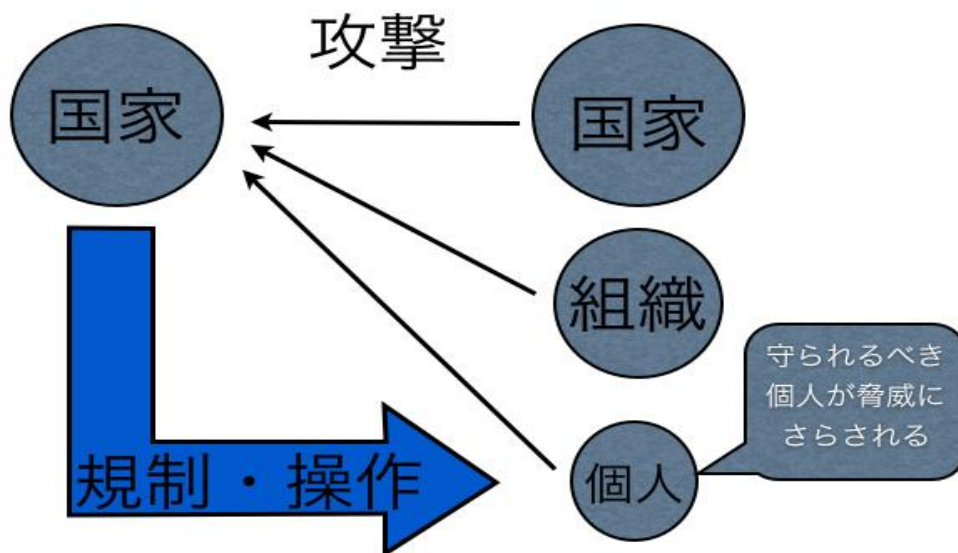


図 2：現在の対立構造⁴

第三節 問題意識から主張までの流れ

第一節で情報革命を分析し、第二節でアクター別の脅威を分類した結果、個人というアクターに大きな変化が起きているという事が明らかになった。近年見られたアラブの春やウォールストリート街のデモなど、インターネットを通じて集団化した個人によるムーブメントが起きている。そのことから、インターネットを通じて個人が情報を発信することが、国際社会に影響するようになったのではないかと考えた。

よって本論での問題意識は「インターネットによる個人の変容は国際社会に影響を与えているのではないか」とする。

では、個人の何が変容したのか。また、それによってどのような国際社会への影響があったのか。この二点を見るために本節では①「革命的側面」②「文化・思想的側面」③「政治体制的側面」④「サイバー攻撃的側面」の四つの側面から分析を行う。その結果以下のような二つの流れがあることが明らかになった。

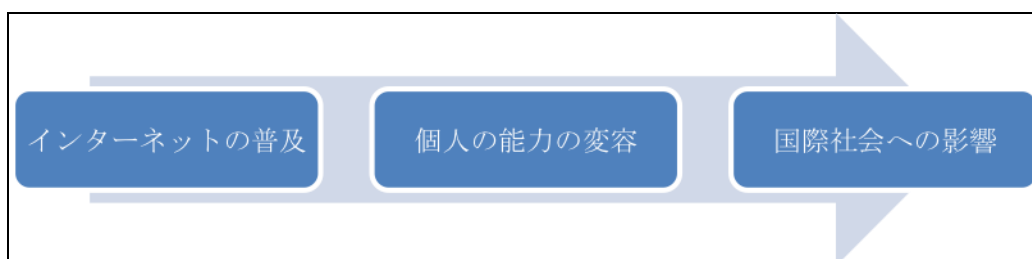


図 3⁵

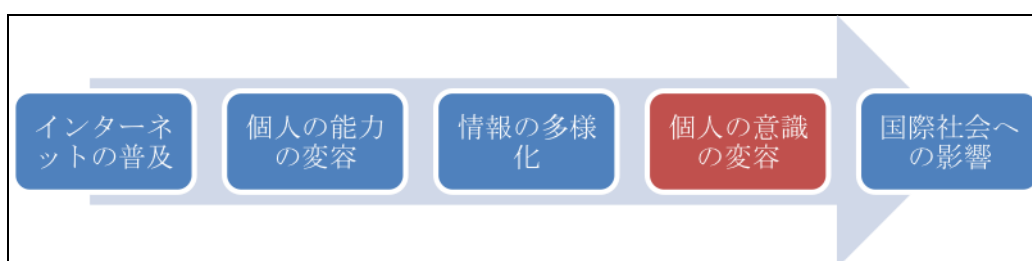


図 4⁶

「サイバー攻撃的側面」からは図 3 の流れが言える。2012 年に国際的ハッカー集団「アノニマス」のメンバーが、日本政府の政策に対しての抗議目的で財務省などのウェブサイト不正アクセスし混乱を招いた。これは、個人がインターネットのネットワークとテクノロジーを利用することで、国家を揺るがせるほどの力を得たことを示す。

しかし、本論では①②③の側面から見える図 4 の流れに注目する。なぜ図 4 に注目するのか。図 3 において力を得たのはサイバーテロを起こせるような特別な技術力をもった個人だけである。それに対し図 4 では特別な能力を持たない一般的な生活を送っている個人の能力が変化した。これにより情報が多様となり、個人の意識の変容が生まれた。この意識の変容こそがインターネットによってもたらされた大きな変化であり、それは社会への影響も起こしうるものなので注目すべき点であると考えられる。

では、その過程をアラブの春を基に説明していく。アラブの春では、インターネットが従来のメディアでは取り上げられなかった問題を顕在化させた。それによって、個々人が議論し、世論を形成、最終的には独裁体制を崩すまでに至った。

このことは固定観念に対し、問題意識を持った一個人が声を上げた事により、それに共感、影響された個々人が集団化した。そして固定観念を打ち砕こうとした結果、今回の一連の流れが生まれた。個々人の固定観念を打ち砕こうとする意識の変容が訪れた時にこそ社会は大きく変動する。そのきっかけとなるものがインターネットなのではないか。

この個人の意識の変容という側面、そしてそれをもたらさうる情報の多様化というインターネットの側面に注目したため「インターネットによる情報の多様化によって、個人が社会を改善できるのではないか。」という問いが生まれた。

その問いを基に「インターネットの普及によって起きた発信力の向上などによる個人の能力の変容は、今まで国が扱いきれなかった問題や表だって見られていなかった問題を表象化・顕在化させ、情報選択の幅という情報の多様化が生じた。それによって起きた個人の意識の変容で、個人という小さなアクターから社会を改善できるのではないか。」という仮説が成り立つのではないかと考えた。以下、第二章のサウジアラビアにおける女性の運転問題においてこの問いと仮説を論証していく。

第二章

第一章ではインターネットの普及について触れたが、それは本章で扱うサウジアラビアの事例にも適応する。

サウジアラビアにおけるインターネットの普及率と比例して **Facebook** のようなソーシャルメディアも年々普及している。その利用率を見るに、若年層が多数を占め、男女比は2011年時点で7:3である。

このようにサウジアラビアでもインターネットが普及しつつあることから、女性が運転することを妨げられている現状に対して、「インターネットによって個人の意識の変容は社会を改善できるのではないか」という問いに対してアプローチした。そのために、本章ではサウジアラビアの女性運転解放運動を事例として論証する。したがって、サウジアラビアの女性の現状を先に分析し、その社会状況をインターネットによる個人の意識の変容によって改善する方法を提唱する。

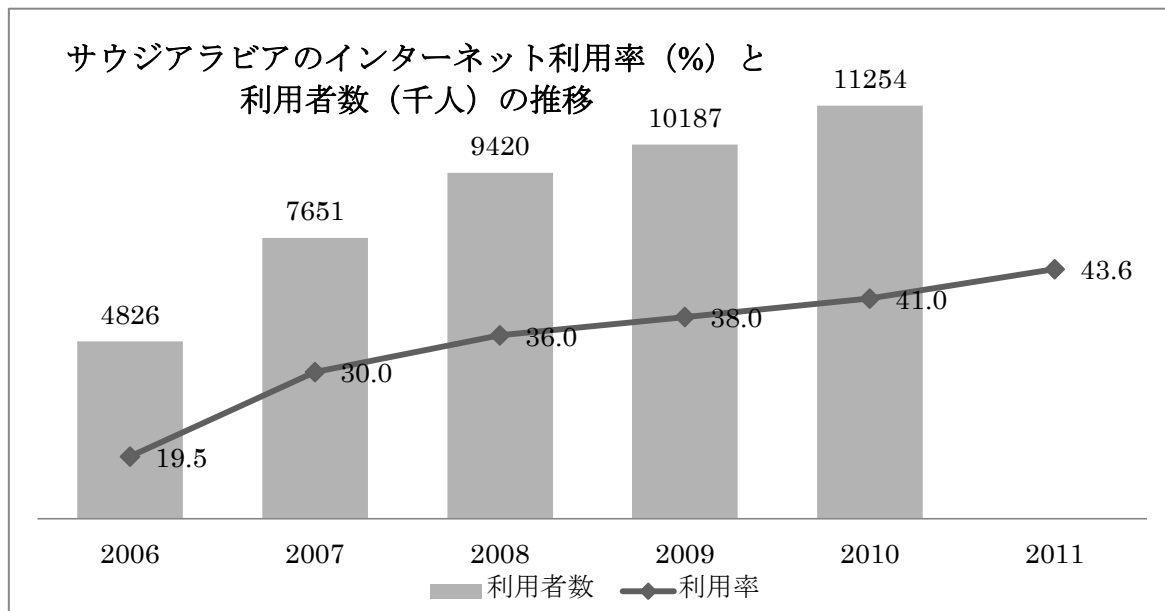


図 4 サウジアラビアにおけるインターネット利用率と利用者数の年代別推移⁷

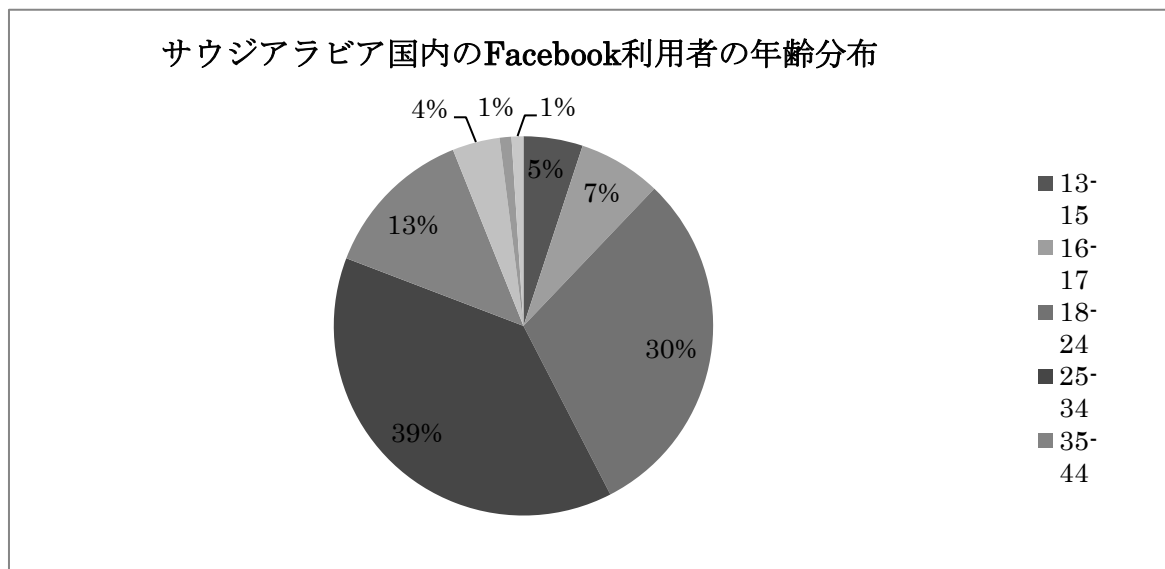


図 5 サウジアラビアにおける Facebook 利用者の年齢分布⁸

第一節 サウジアラビアの女性の現状

サウジアラビアにおいて、1992年に制定された統治基本規則では男女間の平等については言及されていない。民主化が進められていながらも、現在に至るまで女性の参政権は認められていない。立法機関である閣僚会議でも2009年に初めて女性の副大臣が誕生したが、いまだに大臣は存在しない。国王の諮問機関である諮問評議会の議員は全員男性で占められている。

同国は国際条約の一つである「女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約 (= CEDAW)」を部分批准している。しかし、2010年時点では15歳以上の女性の就労率は未

だ 3 割に満たず社会進出が進んでいないことがうかがえる。加えて民間部門で働いている女性はそのうちの 1 割にも満たない。また、失業率は 2009 年時点において全体で 10.5% であり、その内訳は、男性が 6.9%、女性が 28.4%を占めている

スイスの World Economic Forum が毎年男女格差についての報告をしている。これは経済への参加と機会、学識レベル、健康、政治的支援それぞれ四分野から判断されるものである。2011 年のサウジアラビアにおいて、男女格差の指数は 135 カ国中 131 位と最下層に位置している。

その一方で女性の社会進出の流れもみられ、女子の識字率は 1992 年の 57.3%から 2008 年には 80.2%へと上昇している。また、公の場では女性のスポーツ参加を禁じていたが、ロンドンオリンピックに向けて初めての女性馬術選手が誕生した。(しかしながら、馬の怪我によりオリンピック出場は断念している。)

サウジアラビアは厳格なイスラム国家であり、教義として男女がみだりに同じ空間にいることは禁じられている。そのため、女性の社会進出がみられるものの、男女が隔離されるのである。女性は自分の父や夫以外の男性と外に出ることは許されていない。これは、生活に必要なお金は男性が出すので女性は従順に男性に従うべきであり、さらに女性は男性から守られる立場であるというコーランの第四章の教えにもとづいている。このためサウジアラビアは世界で唯一女性の自動車運転を禁止している。なぜなら、女性が車を運転すると多くの男性と知り合うようになり、性的関係を結ぶと考えられているからである。車で外出する場合にはイスラム教徒ではない外国人ドライバーが運転するか、もしくは“マフラム”と呼ばれる人と同乗あるいは運転する必要がある。ここにおける“マフラム”とは親(法律上も含む)、おじ・おば、祖父・祖母、乳母などのことであり、この場合女性は運転できないため含まれない。そのため女性が一人で大学や職場に行く時には、未発達な公共交通機関を使わざるを得ず、女性は男性と比べて不利な立場に置かれている。

第二節 インターネットを利用した女性運転解放運動の展開

今までサウジアラビアでは、大きく分けて 3 回(1970 年代、1990 年、2011 年)女性の運転を目指す運動が起こっている。そのうち 1970 年代、90 年の運動は失敗に終わってしまった。1970 年代のケースでは、イスラム原理主義者による政府批判がテロという形で起こり、政府は保守化した。その結果、政府は女性の権利を制限する政策を打ち出し始め、社会から女性の姿が次々と消えていった。1990 年の時は湾岸戦争にサウジアラビアが参加し、そこに女性兵士が含まれていたことから女性の地位向上が実現した。しかしその後起こった、女性が車を運転する抗議運動が起きた際には宗教警察⁹が出動し、活動家は逮捕され、運動は沈静化した。ただ、東部州やジェッダなどでは顔までベールを覆う女性が徐々に少なくなっている。

2011 年 5 月 19 日には、サウジアラビア人女性のマナル・シャリフ氏が、自身が車を運転している姿をインターネットの動画投稿サイト YouTube に載せた。シャリフ氏は職場に

行く際にタクシーが見つからないことや、国内の交通機関の未整備のために目的地への到着までに不自由をきたすことなど 18 の項目を挙げ、女性が車を運転できないことへの批判を行った。

また、サイトには 1 万 2000 件以上の賛同・支援の意見が寄せられ、わずか 4 日間だけで 50 万以上のアクセスがあった。この映像は当局に削除されたが、支持者たちにより次々にコピーされたものがネット上にアップされた。サウジアラビア女性も運動を展開していき、女性運転映像はシャリフ氏の投稿だけにとどまらず、女性たちによる 100 件の動画が投稿された。また、国内の男性も行動を開始している。解放運動が高まりを見せた後、ある男性は妻の誕生日に自動車の鍵を贈ったそうだ。また、女性により投稿された運転映像には、女性が運転している横で男性同乗者の声が入っているものもあった。結果的にシャリフ氏に対しては鞭打ちの実刑判決が下ったが、国際人権団体 **Human Rights Watch** がシャリフ氏の早期釈放を呼び掛け、さらに **Twitter** での非難も加わり、9 日後に国王の指示で撤回された。

ソーシャルメディアの **Facebook** 上に女性の運転を支援するサイト「**Women2Drive**」が立ち上げられ、女性による集団運転を 6 月 17 日に行うことが呼びかけられた。この一方で、女性運転反対のサイト「イガール・キャンペーン」という 6 月 17 日は女性に自動車運転をさせない日と銘打ったページが立ち上がった。しかしこれは結局目立った反応もなく終わり、特に評価されることもなかった。**Women2Drive** のキャンペーンサイトで 1239 人から得られたアンケート結果を挙げ、84%が 6 月 17 日を女性運転日とすることに賛成しており、57%がその日には運転するという意見表明をしている。また、81%が運転免許を持っていないと回答し、82%が取得できるならばそうしたいと答えている。これらのことから、多くの女性が自ら運転することを希望していることがわかる。それからは「一斉運転の日」として、各地で女性が運転し、その動画もソーシャルメディア上で共有され、男性も含めて 1 万人以上の支持を得た。また、女性の運転権利を認めるよう訴えた署名活動も行われた。7 月にはサウジアラビア聖職者が「不純な性的接触を避けるため、女性は男性に母乳を与えるべきだ」とするファトワ(宗教的勧告)¹⁰を発した。これを逆手に取った女性たちは「女性の運転禁止が続くのであれば、外国人ドライバー達に乳房を見せて授乳する」と警告した。¹¹

これを受け、スルタン皇太子は「父や夫、兄弟が希望するならば女性の運転について検討する。ただ、彼らが女性の運転を希望しないならば、彼女らにそれを押し付けることはできない」として、女性の運転を容認する可能性を示唆した。

また、男性と女性が接触することを避けるために、数年前までは下着店では女性の就労が認められておらず、男性店員が接客をすることで女性の精神を傷つけているということがあったが、これも **Women2Drive** と同様にソーシャルメディアの活躍により、下着店の店員は女性にも認められることになった。また、レイプに遭った女性が姦通罪¹²として訴追され、ムチ打ちの刑を受け、国際的避難を浴びて撤回に動いた例も複数ある。

第三節 世界への影響

1995年の国連世界女性会議において現アメリカ国务長官であるヒラリー・クリントン氏は「人権は女性の権利であり、女性の権利は人権である」と発言した。彼女は、長年女性の人権活動に尽力している中心人物の一人である。

サウジアラビアで、女性の自動車運転解放の要求が高まった 2011 年、クリントン氏は Women2Drive から支持を嘆願する書簡を受け取った。だが、クリントン氏は書簡を受け取ったものの沈黙を守っていたため、活動家から問題視する声が出ていた。だがその後、6月17日のサウド・サウジアラビア外相との電話会談時に、クリントン氏は、女性の自動車運転問題を取り上げ、運動を支持する考えを示した。2011年6月21日の国務省での記者会見でも、「これは米国の問題ではなく、サウジアラビアの女性の問題だが、サウジアラビアの女性たちは勇敢であり、彼女たちが求めているものは正しいものである。彼女たちの行動に心を動かされた。彼女たちの行動を支持する。」と発言した。これを受けて Women2Drive は翌日の 22 日、クリントン氏宛てに再び書簡を送付した。

- サウジアラビアの女性の運転権利を支持することを強力かつ単純な声明で明らかにすることをクリントン氏に期待したいということ。
- 自動車運転問題を公に表明することを要求するということ。
- 自分たちの運動はサウジアラビア史上最大の女性の権利をめぐるキャンペーンであること。

同日、ビクトリア・ヌーランド米務省報道官はこの 2 度目の書簡を受け、クリントン氏が「われわれは密かにこの問題に言及するとしても、公に話すのは時宜にかなっており適切であると感じる」とコメントし、書簡に目を通したことを伝えた。また、このコメントを受け、Women2Drive も直ちに女性運転解放運動に勝利したのだと主張した。クリントン氏自身も「自分もその他アメリカ政府高官も、この問題をサウジアラビアの最高政治レベルとの間で取り上げた。我々はサウジアラビアを含む世界の女性が自分たちの生命や将来について決定する権利があることを明らかにした。我々は私的にも公的にも、すべての政府が差別の問題を取り上げ、女性も自らの潜在性を実現するために平等の権利をもつことをたしかなものとした」と語った。このようにしてサウジアラビアの女性の権利獲得のために努力することをクリントン氏は改めて表明した。また、同国の議員であるナンシー・ペロシー氏もサウジアラビアの女性を支持することを表明している。

この事例では、Facebook 上の Women2Drive のファンページをはじめとするソーシャルメディア上でシャリフ氏を支援すべきという世論が形成され、その結果として女性の人権活動に尽力しているクリントン氏に書簡を送るというアクションに至ったと考えられる。

ウクライナの女性人権団体「FEMEN」はトップレス¹³で抗議活動を行うことで有名だ

が、2011年6月にウクライナ国内のサウジアラビア大使館周囲で車から身を乗り出して抗議活動を行った。これはシャリフ氏のYouTubeの映像を見ての影響であると推測される。また、世界各国の個人がサウジアラビア女性の運転解放を呼び掛ける動画をYouTubeに投稿しており、国際的に女性の権利を保障すべきだという世論が形成されていることがわかる。

2011年6月には、クリントン氏に続きドイツのメルケル首相もWomen2Driveを支持することを表明¹⁴し、同年7月にはEUのキャサリン・アシュトン高級代表（前EU副大統領）も同様の見解を示している。アシュトン氏はサウジアラビアの女性に戦うよう求める書簡の中で、サウジアラビア政府に対して国際女性権利会議を履行するように求め、CEDAWを批准するようにも訴えた。

2012年5月にはシャリフ氏がハベル賞(Václav Havel Prize for Creative Dissent)を受賞した。¹⁵この賞はニューヨークに拠点を置くHuman Rights Foundation (HRF)によって設立されたもので、中国の芸術家で人権活動を続けているアイ・ウェイウェイ氏やミャンマーの人権活動家のアウンサンスーチー氏も受賞している、国際的な賞だ。

第四節 事例から見た考察

第一章であげた「インターネットの普及によって起きた発信力の向上などによる個人の変容は、今まで国が扱いきれなかった問題や表だって見られていなかった問題を表象化・顕在化させ、情報の選択の幅という情報の多様化が生じた。それによって起きた個人の意識の変容で、個人という小さなアクターから社会を改善できるのではないか。」という仮説をもとにして、第二節で挙げたサウジアラビアの事例を考察すると、次のようになる。

サウジアラビアではコーランに基づく慣習により女性は運転を禁止されている。このことを問題視したシャリフ氏という一個人がインターネット上において問題提起・意見発信した。つまりこれまで解決に至るまでの広がりを見せることのなかった、女性が自分で自動車を運転できない問題をインターネットでも提起したのである。そして、世界中にこの運動を拡散することに成功し、国際世論を味方につけ、一部ではあるものの、要求を通すことに成功した。そして、今回の運動の際には男性も合流したところに大きな意義がある。身内の女性を守ろうと多くの男性も女性を支援する側にまわり、運動を支えていたのだ。それにより、この主張はより厚みを持ったものになり、多くの支持を得ることに成功した。

こうして、この問題が不特定多数の個人の目にふれることになった。インターネット経由で運動を知った諸外国の人々によっても新たな視点の問題提起がなされた。これは情報の多様化であるといえよう。情報の多様化の結果起きた事実として、女性の運動参加、男性の支持表明、さらには議論の活発化が挙げられる。このことから、国内の女性自身が問題意識をもつようになり、行動を起こすことで社会を変えられるという意識が芽生えたことがわかる。国内の男性の間でも、女性の運転を容認すべきだという意識が主流になった

と考えられる。それを見た諸外国の個人は、サウジアラビアの女性運動を支持するようになった。また、諸外国政府の支持表明もみられるようになった。

これらの政策は、ただ単に女性による政治への反発を避けるためではなく、アラブの春によりアラブ地域の人々の改革意識が高揚し政権基盤が揺らぐ中で、サウジアラビアにも革命の火が及ばないようにする懐柔策と見ることもできる。また、この一連の流れで、女性の地方参政権を認めることが決定しており、国民の「ガス抜き」をしようとしていることが伺える。

こういった一連の動きに対して 1970 年代、90 年の運動はサウジアラビア国内での単独の運動であったため、外部と連動すること無く発生し、継続が困難であったと推測できる。しかし **Women2Drive** では、アラブの春による革命の波が押し寄せていたことに加え、インターネットによる議論の「場」の発生によって情報の多様化が生まれ、それが瞬間的に広域に拡散していったため、運動が世界中に広まり、支持者を爆発的に増やしていった。つまりサウジアラビア国内の個人の意識が変容したことにより、世界の個人や以前までは個人の力が及ばなかった国家という規模までをも動かすことが可能となったのである。

また、女性の運転解放の例だけでなく、ムスリムの女性が自らの権利を主張した事例がある。エジプトの首都カイロのタフリール広場において女性の活動家、ジャーナリストへの性的暴行が止まないことから、ソーシャルメディアで組織された女性を中心とするデモ隊が人権の保護を要求した。始め、暴行はムバラク大統領側の人間によってなされていたことから、ジャーナリストは「政府による、女性をデモに参加させないための措置」だとして非難している。このように、サウジアラビアに留まらず、ムスリムの女性が権利を求める事例は国際的に起こっていることから、今後ますます拡大していくグローバル社会において、こうした社会不安を提起するための手段としてソーシャルメディアは多くの役割を担っていくことがわかる。

本論ではこれらの動きに大きな役割を担ったのはインターネットの普及であると考えているが、これらの事例を分析すると特にソーシャルメディアの役割が大きいのではないかという考えに至った。具体例を上げると **YouTube** のコメント欄は賛否両論様々な意見が集まる場となり、情報の多様化が確保された。また、**Facebook** のページでは、国内の女性がシャリフ氏を支援する運動を呼び掛けた。ここでも多数の意見が集まり、「いいね！」ボタンによりシャリフ氏支持の風潮を生んだ。他にも **Twitter** では、女性の運転解放に関心を持つ世界各国の人々も集まり、互いに活発な議論を交わした。つまり、サウジアラビアの事例においてはソーシャルメディアが議論の「場」として機能した結果、情報の多様化が起きている。加えて今回の事例では、インターネット上の「場」における議論の結果として国際的な世論が形成されており、それによりサウジアラビア国家や諸外国が行動を起こしたといえる。そこで本論では、インターネット上の「場」を組み込んだ論を展開すべきだという結論に至った。

以下、第三章ではインターネットが形成する「場」について考察する。

● まとめ

国際問題	ムスリム社会における文化的価値観（女性の人権問題）。
インターネットの普及	ソーシャルメディアの登場。
個人の能力の変容	情報発信力・受信力の向上によって、個人が YouTube に女性が運転している動画を投稿。
「場」の成立	Facebook 上でのページ作成（Women2Drive）によって、国境を超える議論の場が形成される。
情報の多様化	従来マスメディアで取り上げられなかった情報が取り上げられるようになり、女性が運転することに対して容認する意見が見られるようになる。
個人の意識の変容	女性）女性問題に関して社会に訴える力があることを認識。 男性）女性の免許に対して容認の姿勢を取り始める。 国外）女性運転運動を支持し始める。
文化的規範の形成	サウジアラビア「女性の運転を認めるべき」という公的意志 ムスリム社会における女性の人権問題に対する公的意志。
国家行動への影響	アブドラ国王「免許発効は時間の問題」。
国際社会への影響	女性運転運動が世界各国で多くの支持を得る。

表 3 論の流れとサウジアラビアの事例の対応¹⁶

第三章 個人の意識の変容の背景にある”場”

第二章では、インターネットによる情報の多様化が個人の意識を変容させることが立証されたが、ここで情報の多様化を生み出した最大の要因はソーシャルメディア上での議論であった。このことから本論においては、インターネット上でソーシャルメディアという新たな”場”が登場し、この”場”での議論が個人の意識に影響を与え、社会規範を形成し、国際社会に影響を与えているという点を取り上げた。本章では、個人の意識を変容させた情報の多様化が、ソーシャルメディア上でどのような過程を経て生じたのかを論じ、さらに個人が多様化した情報をどのように活用していくべきかを述懐する。

第一節 インターネット上の”場”とは何か

本論において”場”とは、個人がコミュニケーションや情報共有、議論を行うことを目的として成立する空間と定義づけた。この空間がインターネット上に登場し、情報の多様化を生みだしていると考えられる。ここでいう情報の多様化とは単に情報の量的な増大ではなく、情報の種類が増大し、問題を顕在化させ、個人の情報選択の幅が広がった状態のことである。多数派意見をとりあげがちなマス・メディアとは異なり、インターネットは個人

の発信力の向上によって少数意見をとりあげることができる。この性質が”場”の形成を可能にし、この”場”でのやりとりが社会規範を形成し、国際社会に影響を及ぼすきっかけとなっている。

ではなぜこのインターネット上の”場”で情報が多様化するのでしょうか。インターネットが空間的・時間的制約を取り除いたことで、世代・性別・国籍・社会的地位を超えて個人が情報を発することが可能になった。しかし個人は興味関心のある情報を検索して情報を得るという点で、インターネット上での情報収集は能動的である。よって個人にとって関心のない情報は埋もれてしまうため、個人の意識を変容させる多様な情報を受信することは困難と言える。そこでソーシャルメディアという新たな”場”の登場によって、インターネットでの受動的な情報収集を可能にした。

1章でも述べた通りソーシャルメディアとは、人と人とのつながりを支援するコミュニケーションメディアであるが、既存の組織集団におけるコミュニケーションのみならず、新しい人間関係の形成を可能にした”場”でもある。Facebookのウォールや、Twitterのタイムラインなど、ここでは自ら検索せずとも、不特定多数の個人が発信した情報をリアルタイムで受けとることができるため、受動的な情報収集である。言い換えると、個人の発信した情報が受け手の需要に左右されることなく、国境を越えた不特定多数の個人に受信されやすくなったといえる。また、コメント機能によって、ある情報に対して生まれた疑問や意見を直接発信者に送ることが可能になり、情報収集の能動性も兼ね備えている。

このように、インターネット上での受動的な情報収集を可能にしたソーシャルメディアが、実社会での繋がりが薄かった個人間の橋渡しの役割を担うことによって、人々は多様な個人の意見を受信することができるようになった。これが情報の多様化であり、さらには個人の新たな関心、問題意識の醸成を促すこととなった。またソーシャルメディアというインターネット上の”場”は、実社会での繋がりと違い、国境を越えた議論が可能であるため、国際的な規範を形成し、個人が国際社会に影響を及ぼすことを可能にしたと言える。

第二節 ”場”から情報の多様化が生じた例

第二章の事例から、「個人の変容はインターネット上の”場”での議論によって生じているのではないか」という点に注目した。本節では、第一節で述べた”場”の特徴である「情報収集の受動性によって生じた多様な個人とのコミュニケーション」が情報を多様化させ、個人の意識に影響を与えているということを、初音ミクを世界的に有名にしたニコニコ動画という”場”を例に論証していく。

初音ミクとは、日本で開発された、誰でも自由に歌をソフトに歌わせることができる音声合成・音楽制作（DTM）ソフトウェアの商品名である。1,000本売れば成功といわれるDTM業界であるにも関わらず、数万のオーダーと記録的な売り上げを続けている。従来までは、2004年に音声合成ソフトVOCALOIDが登場するも、一部DTM愛好家の間でし

か流行らず、発表の場もなかったために、聞き手は限られていた。

しかし 2006 年、様々なジャンルの創作動画と視聴者が集まり、視聴者同士の交流を重視した動画投稿サイト「ニコニコ動画」というソーシャルメディアが登場した。これにより、世の中に溢れているアマチュア・クリエイターに初音ミクのソフトウェアの存在が知られ、瞬く間に広まった。今では音楽のみならず、イラスト、映像、CG、コスプレ、生演奏、ダンスなど、ウェブ発の爆発的な二次創作ムーブメントを生んでいる。

この初音ミク人気は国内だけでなく海外にも広がり、2011 年 6 月に発売された初音ミクのアルバムが米 iTunes アルバム「World」カテゴリでトップに君臨した。また、海外の掲示板である 4chan でも初音ミクが話題となり、「ロンドン五輪のオープニングを歌って欲しいアーティスト」というアンケートで初音ミクが 1 位を獲得するという結果に至った。

ニコニコ動画では、サイト内に存在する動画を独自のルール、計算方法で集計し、その結果をランキングとして公開しているページがある。このランキングページに初音ミクが載ったことによって、それまで興味関心を持っていなかった人々にも「初音ミク」という情報に触れる機会が増えた。さらに動画に流れるコメントを通じて、初音ミクの愛好者と、彼らとの関わりが薄かった人との間にコミュニケーションが形成された。それによって、一部愛好家の間で流行していた初音ミクが、音声合成ソフトに興味を持っていなかった人々や、二次創作に偏見を持っていた人々にも関心を持たせた。

実際初音ミクをどこで知ったのかという調査を行った結果、最も多かったのは「ニュースサイト」32.7%、次に「動画共有サイト」32.4%と続く。ニコニコ動画の利用経験で比較すると、頻繁に利用している回答者は「動画共有サイト (65.2%)」が最も多く、利用したことがない回答者では「ニュースサイト (45.3%)」が最も多かった。このことから初音ミク人気の起点が動画共有サイトであることがわかる。

第三節 多様な情報を適切に活用するために

前節の事例より、ソーシャルメディア上での意見交換・議論によって、情報の多様化が生じ、個人の意識が変容していることが明らかになった。しかし、この情報の多様化は新たな問題も内包している。それは、情報の洪水に伴う情報の信憑性の低下である。2011 年 3 月の東日本大震災の直後、ソーシャルメディア上においてデマや流言などを含む多くの情報が錯綜し、情報の信憑性が低下していた。確かに、情報の量的増大はソーシャルメディア以外のメディアでも生じている。しかし他のメディア、特にマス・メディアマス・メディアには大衆に対して事実に基づいた情報を報じる責任があるため、ソーシャルメディアに比べ信憑性の高い情報を発信していると言える。一方、ソーシャルメディアでは個人が大衆に情報を発信することに対しての責任感が薄いことから、情報源の不明瞭な情報を出回らせてしまうことが多い。さらに Facebook の「いいね！」や Twitter のリツイートのように、情報発信がボタン一つで出来るようになったことで、情報源が不明瞭な情報であっても瞬く間に拡散し、信憑性の低い情報の量が増大してしまったと言える。

この問題を解決するにはソーシャルメディアとそれ以外のメディアの併用が有効であると考えた。ソーシャルメディアにおいて疑問に感じた情報についてはソーシャルメディア上で、あるいは電子メールを使いその発信者に直接尋ねるといった一対一の情報通信し、また一対多の情報発信であるテレビ、ラジオ、ウェブサイトで情報の正しさを確かめることにより情報の信憑性を高めることができる。さらに信憑性の高い情報をソーシャルメディア上で発信するためにはそれらを情報源にして情報を発信すれば良い。実際、震災時には被害状況や余震情報、原発事故など事実の経過をテレビで押さえ、個人の安否確認などマス・メディアでは伝えられないより詳細な情報をソーシャルメディアで収集した。また逆に、ソーシャルメディアで得た情報をテレビのニュース映像で再確認した。

個人の意識を変容させるのにソーシャルメディアは重要な役割を担っているが、従来メディアの必要性はソーシャルメディアが登場してからも変わらない。このことから、情報が多様化する中で情報の信憑性を維持していくには、従来のメディアとソーシャルメディアを相互補完的に使用していくことが望ましいと言える。しかしここで留意しなければならないのは、発信者に直接尋ねる際、発信者が悪意を持ってデマを流している可能性もあるため、返答を鵜呑みにすることは危険という点である。また情報の正しさを確認する際は、無名の個人のウェブサイトよりも専門機関等の信頼のおけるウェブサイトを利用していくことが望ましい。このように、情報の信憑性をより高めていくために、情報を収集する際には、どこが信頼できる情報源であるのかを個人が見極めるといった、情報リテラシーを高めていくことも重要な課題である。

終章

これまでサウジアラビアの事例をもとに、インターネットにおける安全保障のひとつのアクターとして台頭した個人の安全を、どのように確保するかについて分析してきた。

第一章では、メディアの発展に言及しつつ、グローバル化および安全保障において、個人が国際社会において主要なアクターとなった経緯について述べた。そして、そこから発生した問題意識・問い・仮説を設定した。

第二章ではその仮説をサウジアラビアの女性問題に当てはめて検証し、その中でインターネットによる個人の能力の変容・意識の変容の生成、ひいては国際社会へ影響している事を示した。そして、その過程における社会改善のポイントとして、多様な情報が確保される“場”の存在を提示した。

第三章では、その“場”がどのようなスペースなのか、また個人の意識の変容が社会にどう影響しているのかを説明した。そのなかで、“場”の問題点として挙げられる情報量の増大による信憑性の低下とその分析および解決策を提示した。

以上のことを踏まえ、本章では情報・メディアセクションが設定した問い「インターネ

ットによる情報の多様化によって、個人が社会を改善できるのではないか」に対して改めて論証する。

本論のもっとも重要な主張は、インターネットは情報収集ツールとしてだけでなく、個人の意識の変容までも促すことができるということである。従来のマス・メディアは議題設定効果により、「第三の権力」として偏った情報も流していた。ところが、インターネットの登場によって多様な情報がネット上を行き交うようになり、人々がマス・メディアでは触れられなかった情報を目にし、今までの生活では出会えなかった人々との交流をもたらした。それは当たり前だった日常に新たな視点を人々に提供し、これにより個人は当り前の現状に疑問を抱くようになった。歴史的に見ても、常に変化を起こす要素として個人の意識が重要である。その一個人の意識の変容が何よりインターネットによって世界的規模での個人の集合体の構築、その中での世論の形成、そしてこの世論が個人の行動基準となることで国際的規範にまで醸成された。このムーブメントの元である個人の意識の変容が生じたのが、インターネットという“場”だった。

第三章で指摘された通り、“場”は万能ではなく欠点はもちろんあるので、この世の全ての問題を解決できるわけではない。しかし、インターネット空間は、際立って特別な知識を持っているわけではない普通の個人が社会変革を、ひいては個人の安全をもたらす“場”である。そのため、情報・メディアセクションとして「情報」を「情を報じる」、つまり主観的見解を前提とするものと定義した。そして、たとえその“場”で一個人があげた悲鳴であっても、インターネットを用いれば、黙殺することなく社会の改善のために活用できることの証明に他ならないと考えた。このインターネットがもたらす意識の変容が、国際社会に普及し、国際社会を少しでもより良いものにさせる事を願い、結びと変えさせていきたい。

1 著者作成

2 著者作成

3 著者作成

4 著者作成

5 著者作成

6 著者作成

7 出典：Social Bakers—”<http://www.socialbakers.com/facebook-statistics/saudi-arabia>（2012年6月26日。）

8 出典：Social Bakers—”<http://www.socialbakers.com/facebook-statistics/saudi-arabia>（2012年6月26日。）

9 イスラム教において悪徳とされる行為を禁止し、徳のある行いを推奨することを目的とした、イスラム価値観における倫理道徳的な立場から一般人に教育的指導を行なう組織。勸善懲悪委員会、ムタワとも呼ばれる。

10 イスラム教の法学者が宗教的な立場から出す見解・判断。法律による拘束力はないが、心理面から教徒に多大な影響を及ぼす。

11 出典：Groove Japan チャプター9—”<http://gj1.groovejapan.jp/videos/09/>（2012年6月29日。）

12 男女が道徳や法にそむいた交わりを結ぶこと。特に、既婚者が配偶者以外の男性と肉体関係を持つこと。不義、密通。

13 乳房の部分のない女性用の水着またはドレス

¹⁴ 出典：pisqa”Saudi Arabia:Women driving their new cars in Riyadh”—

<http://www.pisqa.com/06/Saudi-arabia-women-driving-their-new-cars-in-riyadh/> (2012年6月30日。)

¹⁵ 出典：The Václav Havel Prize for Creative Dissent —<http://www.havelprize.org>(2012年6月30日。)

¹⁶ 著者作成作成

【論文参考文献】

赤根谷達雄, 落合浩太郎, 中西寛, 栗栖薫子, 中沢力, 2009年, 増補改訂版『「新しい安全保障」論の視座』亜紀書房.

『朝日新聞』2008. 3. 26 夕刊

石川博, 2011年, 『集合地の作り方・活かし方——多様性とソーシャルメディアの視点から』共立出版株式会社.

小川浩, 後藤康成, 2006年, 『Web2.0が面白いほどわかる本』中経出版.

川上善郎, 1993年, 『電子ネットワークの社会心理——コンピュータ・コミュニケーションへのパスポート』誠信書房.

菅谷実, 金山智子, 2007年, 『ネット時代の社会関係資本形成と市民意識』慶應大学出版会.

片桐新自, 1995年, 『社会運動の中範囲理論——資源動員論からの展開』東京大学出版会.

鈴木健二, 2007年, 『デジタルは「国民＝国家」を溶かす——新メディアの越境・集中・対抗』日本評論社.

辻上奈美江, 2011年, 『現代サウディアラビアのジェンダーと権力——フーコーの権力論に基づく言説分析』福村出版.

土屋大洋, 2001年, 『情報とグローバルガバナンス——インターネットから見た国家』慶應義塾大学出版会.

中西寛, 栗栖薫子, 中沢力, 赤根谷達雄, 落合浩太郎, 2007年, 『新しい安全保障論の視座』亜紀書房.

中村覚, 2007年, 『エリア・スタディーズ 64——サウジアラビアを知るための 65 章』 明石書店.

Benedict, Anderson., 1983, Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, Brooklyn, New York: Verso Books, (=1987, 白石隆, 白石さや訳 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』 リプロポート.)

千川剛史, 2006年, 『デジタル・ネットワーキングの社会学』 晃洋書房.

山川正光, 1990年, 『やさしいメディア技術発達史読本』 日刊工業新聞社.

山田高敬, 大矢根聡, 2011年, 『グローバル社会の国際関係論 (新版)』 有斐閣.

吉田純, 2000年, 『インターネットの社会学——情報ネットワーク社会と公共圏』 世界思想社.

吉見俊哉, 2004年, 『メディア文化論——メディアを学ぶ人のための 15 話』 有斐閣アルマ.

Jurgen Habermas., 1990, Lstrukturwandel der Öffentlichkeit: Unt ersuchungen zu einer Kategorei der burgerlichen Gesellschaft, Frankfurt am Main: Suhrkamp, (=1994, 細谷貞雄, 山田正行訳 『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求 (第2版)』 未来社.

ITMedia “トルコでも Anonymous メンバー32 人拘束、スペイン警察サイトは報復攻撃でダウンか”

—<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1106/14/news020.html> (2012年6月4日。)

ITmedia ニュース「TBS「アッコにおまかせ」の初音ミク特集に批判相次ぐ」

—<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0710/15/news008.html> (2012年6月26日。)

Adver Times “ハッカー集団アノニマス 攻撃対象はアジア圏!?”

—<http://www.advertimes.com/20120524/article68316/> (2012年6月4日。)

AlJazeera English 2011 「Saudi woman campaigns for right to drive」 Youtube 2011/05/11

—<http://www.youtube.com/watch?v=gke1CYaKVOY> (2012/6/25。)

イスラムのホームページ 2008 「アル=クルアーン日亜対訳」

—<http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/quran/quran000.htm> (2012年6月25日。)

Infonet 2012 「インターネットの国別普及率表」

—http://www.infonet.co.jp/ueyama/ip/internet/inet_dif_tbl.html (2012年06月25日。)

いまさら聞けない「ソーシャルメディア」とは? : 日本経済新聞

—http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK1202L_S0A410C1000000/ (2012年6月28日。)

NIHU プログラム・イスラーム地域研究「サウジアラビア民主化の経緯」

—

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me_d13n/database/saudi/democratization.html
(2012年6月11日。)

AFP “国際ハッカー5人が関与したサイバー攻撃のリスト”

— <http://www.afpbb.com/article/disaster-accidents-crime/crime/2863397/8606044>
(2012年6月4日。)

AFP BB News 2012 「男性店員を法律で禁止、サウジアラビアの女性下着店」 2012/01/06

—<http://www.afpbb.com/article/life-culture/life/2849072/8249009> (2012年6月25日。)

AFP BB News 2011『「運転する女性はひもで叩こう」、フェイスブックの呼び掛けが物議 サウジ』 2011/05/26

—<http://www.afpbb.com/article/life-culture/religion/2802502/7260556> (2012年06月21日。)

AFP BB News 2011『サウジ国王、車運転した女性へのむち打ち刑を撤回』 2011/09/29

—<http://www.afpbb.com/article/politics/2831430/7836455> (2012年06月21日。)

AFPBB News 2011 「4日間ノンストップ走行、サウジ女性が運転禁止令に抗議」
2011/05/16

—<http://www.afpbb.com/article/life-culture/life/2800074/7221833> (2012年6月13日。)

沖縄タイムズ 2011 「なぜスバル? 運転解禁でサウジ女性ら販売停止要請」 2011/06/23
—http://www.okinawatimes.co.jp/article/2011-06-23_19575/ (2012年6月25日。)

カウンセリングルーム: Es Discovery—情報革命がもたらした紙の新聞の需要減少と情報
コンテンツのビジネスの困難2
—http://charm.at.webry.info/200709/article_16.html (2012年6月27日。)

柏井茂幸『グローバリゼーションと表象日本』
— <http://www.fic.i.hosei.ac.jp/~morimura/members/3rd/kashiwai/date/thesis2.htm>
(2012年6月22日。)

Gigazine 2011 「車の運転をしたサウジアラビアの女性がむち打ちの刑に処される」
2011/09/28
—http://gigazine.net/news/20110928_driving_woman_punished_by_whip/ (2012年6月
13日。)

The Global Gender Gap Report 2011: Rankings and Scores
—http://www3.weforum.org/docs/GGGR11/GGGR11_Rankings-Scores.pdf (2012年6
月30日。)

サウジアラビア社会における女性の存在
—<http://www.jccme.or.jp/japanese/11/pdf/11-19/11-01-99.pdf> (2012年6月28日。)

「サウジアラビアと「アラブの春」—レンティア国家と民主化問題—」
—<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/english/2012051fukuda.pdf> (2012年6月12
日)

SoudehRad 2012 「Supporting Women2drive in Paris」 Youtube 2011/06/17
—<http://www.youtube.com/watch?v=X50Lc-NK0dE&feature=youtu.be> (2012年6月
25日。)

榊原櫻 2011 「中東情勢分析 サウジアラビアの女性自動者運転容認問題」 中東協力セ
ンターニュース 2011/06/07
—<http://www.jccme.or.jp/japanese/11/pdf/2011-06/josei03.pdf>

(2012年6月13日。)

Sankei Express 2011『サウジ王女の反乱…ブログで体制批判』2011/09/09
—<http://www.iza.ne.jp/news/newsarticle/world/mideast/527054/> (2011年6月21日。)

Sankei Express 2011『サウジの春 アメとムチ 自動車運転女性に初の実刑判決』
2011/09/29
—<http://www.iza.ne.jp/news/newsarticle/world/mideast/530053/> (2012年6月21日。)

産経新聞 2011 『サウジ女性、運転解禁求めスバルに販売停止要請』2011/06/23
—<http://www.iza.ne.jp/news/newsarticle/world/mideast/513950/> (2012年6月21日。)

庄司真理子, 「国連における人間の安全保障概念の意義」
—<http://subsite.icu.ac.jp/coe/icra/23syoji.htm> (2012年6月8日。)

19世紀イギリスにおける電信国有化 —新技術の普及と公共性の観念
—<http://shinka-nagoya.upper.jp/file/pdf/sessionb/matsunami2.pdf> (2012年6月27日。)

世界情報通信事情 2010 「サウジアラビア」

—

<http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1052035/g-ict.soumu.go.jp/country/saudi-arabia/detail.html> (2012年6月25日。)

SocialBakers”facebook Statistics Saudi Arabia”
—<http://www.socialbakers.com/facebook-statistics/Saudi-arabia> (2012年6月29日。)

竹下俊郎, 「メディアの議題設定機能—マスコミ効果研究における理論と実証—」
—<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/B14/B1405341/1.pdf> (2012年6月26日。)

中東・エネルギー・フォーラム 2011『最近の中東・エネルギー情勢から—フェイスブックによる呼びかけで女性の社会進出や地方評議会への参画を求める「我が国家」と題するキャンペーンの始まったサウジアラビア』2011/02/10
—http://www.energyjl.com/2011_folder/February/11new0210_2.html (2012年6月21日。)

中東・エネルギー・フォーラム 2011 『最近の中東・エネルギー情勢から—実行されたフェイスブックで呼びかけていた女性の運転禁止に抗議するための女性によるサウジ都市での路上運転』 2011/06/21

—http://www.energyjl.com/2011_folder/June/11new0621_4.html

(2012年6月21日。)

中東・エネルギー・フォーラム 2011 『最近の中東・エネルギー情勢から—ようやく釈放された路上での自動車運転を行い拘束されたサウジアラビアのマナル・アル・シャリフ女史』 2011/06/03

—http://www.energyjl.com/2011_folder/June/11new0603_7.html

(2012年6月21日。)

二村伸 2011 「ピックアップ@アジア 「イスラムの女性たちはいま」NHK 2011/10/20

—<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/450/98866.html> (2012年6月13日。)

日本経済新聞「今さら聞けない「ソーシャルメディア」とは？」—

—http://www.nikkei.com/article/DGXNASFK1202L_S0A410C1000000/ (2012年06月

28日。)

野口雅昭 2011 「サウディ女性の運転問題」 Blogos 2011/06/19

—<http://blogos.com/article/16680/> (2012年6月25日。)

電通「SIPS」

—<http://www.dentsu.co.jp/sips/index.html> (2012年6月28日。)

マイナビニュース、バーチャル・アイドル歌手『初音ミク』の人気の秘密とは？

—<http://news.mynavi.jp/news/2012/04/23/101/index.html> (2012年6月11日。)

非営利・非政府組織 Non-Profit Organization (NPO) / Non-Government Organization (NGO)

—<http://www.geocities.jp/li025960/home/topics/n02.html> (2012年6月30日。)

東日本大震災に見るソーシャルメディアの役割—日本のソーシャルメディア革命

—http://www.kkc.or.jp/plaza/magazine/201105_10.html?cid=6 (2012年6月30日。)

平成 23 年版 情報通信白書 第 2 部 特集 共生型ネット社会の実現に向けて

— <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/html/nc232330.html>
(2012 年 6 月 22 日。)

星野俊也 「サイバー空間における脅威と安全保障・危機管理のあり方」

—http://www2.jiia.or.jp/pdf/ampo/h13_ampo/1.pdf (2012 年 6 月 4 日。)

Voice of Russia 2011 「クリントン国務長官 サウジ女性の運転の権利を支持」 2011/06/22

—

[http://japanese.ruvr.ru/2011/06/22/52221863.html?utm_source=feedburner&utm_medium=twitter&utm_campaign=Feed%3A+TheVoiceOfRussia+\(The+Voice+of+Russia%2C+%E8%A8%98%E4%BA%8B%E4%B8%80%E8%A6%A7\)](http://japanese.ruvr.ru/2011/06/22/52221863.html?utm_source=feedburner&utm_medium=twitter&utm_campaign=Feed%3A+TheVoiceOfRussia+(The+Voice+of+Russia%2C+%E8%A8%98%E4%BA%8B%E4%B8%80%E8%A6%A7)) (2012 年 6 月 25 日。)

山尾有紀恵 2012 「【再録夕刊連載<素顔に迫る>サウジアラビアの女性は今 1】下着店の店員は女性、だから気軽」朝日新聞 2012/03/05

—<http://astand.asahi.com/magazine/middleeast/report/2012030500004.html> (2012 年 6 月 25 日。)

山本達也, 「中東政治変動におけるニューメディアの役割と影響力」

—http://www2.jiia.or.jp/pdf/resarch/H23_MiddleEast/06_Yamamoto.pdf (2012 年 6 月 11 日。)

YouTube 「Google Chrome: Hatsune Miku (初音ミク)」

—<http://www.youtube.com/watch?v=MGt25mv4-2Q> (2012 年 06 月 10 日。)

[4chan]2012 年 ロンドン五輪 OP 歌手投票で初音ミクを 1 位にしよう [海外掲示板翻訳]

—<http://animeng.blog5.fc2.com/blog-entry-753.html> (2012 年 6 月 11 日。)

Reuters 2011 『サウジ女性が運転禁止の解除訴え、「免許あれば教官になるのが夢」』
2011/06/28

—

<http://jp.reuters.com/article/JPTradersMarketsNews/idJPJAPAN-21923320110628?pageNumber=2&virtualBrandChannel=0&sp=true> (2012 年 6 月 21 日。)

Reuters 2011 『サウジ女性、車運転強行』 2011/06/17

—<http://jp.reuters.com/article/kyodoMainNews/idJP2011061701001116> (2012年6月21日。)

Reuters2011 『サウジで女性に初の参政権、「アラブの春」が影響か』 2011/09/26

—<http://jp.reuters.com/article/topNews/idJPJAPAN-23340820110926> (2012年6月21日。)

Reuters 2011 『サウジで女性の「集団運転」運動』 2011/05/30

—<http://jp.reuters.com/article/kyodoMainNews/idJP2011053001000519> (2012年6月21日。)

Reuters2011 『サウジの下着店で女性店員採用の動き、育成費は店舗負担』 2011/08/02

—<http://jp.reuters.com/article/oddyEnoughNews/idJPJAPAN-22485320110802> (2012年6月21日。)

Reuters 2011 『「女性の運転認めて」、サウジアラビアで抗議行動』 2011/06/20

—<http://www.afpbb.com/article/politics/2807378/7375214> (2012年6月21日。)

ロンドンオリンピックの歌手投票で K-POP を抜き初音ミクが1位に！

—<http://getnews.jp/archives/162814> (2012年6月11日。)

Web 情報の世紀—情報革命とパラダイムシフト

—<http://d.hatena.ne.jp/joakmm/20080601/1212319297> (2012年6月27日。)